

“沙門”として

「托鉢」と「布教」に生きる

宗教人からのメッセージ

法に照らして行為を省み、わが立場を見極め、
できる範囲で欲を少なく生きてみる。

時流に直面しても、流れに任せず、ほんの少し立ち止まって、自覚的に考えてみる。
そんなことを教えてくれる仏教は「生活に役立つ」ものだと言う。

生活に有効な仏教を、少しでも多くの人々に知ってもらいたい」

上座部の仏教に帰依し、沙門を名乗り、週に二回は托鉢に立つという酒主浄忍

氏に、仏教的な生き方のこと、仏教を広めるために開いている勉強会のことなどについて聞いた。

酒主浄忍（さかぬし・じょうにん）

仏教者・ダンマサーナ（法座）「主宰

托鉢を続けて

若い頃から仏教を学び、やがて四十歳を過ぎて、会社を辞めてから本当に発心したと伺っています。そして、沙門しゃもんとして生きようと決意されたとき、托鉢を生活の軸に据えられた。なぜ、托鉢だったのですか。

酒主 それは、自分の生活の中にある仏教、その仏教を求めするために必然的なものだったからです。私は僧侶志願者でしたが、僧侶ではありません。在家の沙門しゃもんですから、仏法を極めたいとまでは言わない。しかし、自分なりの道を選び、仏教に生きようとは、心から思っています。

私自身はテラワダー(注)、つまり上座部仏教を信奉する者だと考えていますから、必然的に托鉢という行が基本になるのですよ。パリー語の原始経典を読むと分かりますが、托鉢は根本的な行為であり、修行なのです。まさに、根本の部分を行っているというだけのことだと思っっているのです。

沙門しゃもんを名乗るのも、そういう意味です。僧侶では

なくても、仏教を中心として生きる修行者であり続けたい。沙門しゃもんというのは、私の自覚では、そういうことなのです。

托鉢は、少なくとも私にとっては、宗教的に生活していくうえでの基本ですから、決して止めてはいけな
いと思っっている。もちろん、托鉢で喜捨していただくものなんて、金銭面では微々たるものですよ。実際にそれで食っているわけでもない。幸い、今では年金もちやんと入りますしね。けれども、托鉢で生活するわけではないにしても、あるいは形だけであったとしても、やり続けるのです。それが基本的な行為だと理解しているからです。

週に二回、駅前駅前に立ち続ける。「托鉢している行者が、そこにいるんだ」ということを人々に見せるためにも。それだけで役割があると思うのです。私がある場場にいることで、縁を結び、掴んでいく人があるからです。「お坊さんが立っっていると、街が引き締まりますね」と、声を掛けてくれる人もいます。本当は、お坊さんではないのですが、私も「ありがとうございませ」と(笑)。

それは、やはり出逢いでもあるわけですね。

酒主 今では人生相談所、仏教総合案内所のようになっていますよ。「夫の家から追い出されそうだが、どうすればいいか」とか、「母親が死んでしまったが、私は無一文だ。お葬式はどうしてもやらなきゃいけないか」とか。女子高生がやって来て「彼氏が暴力を振るってしようがないのだが、どうしたらいいですか」。私は「たぶん、時間がたつても直らないだろうから、別れなさい！」(笑)。

つまりは、人間は一人だけでじつと悩み込まないほうがいい、ということなのだと思います。私としては、今まで過ごしてきた人生を通して、「こういう答えでいいのかな」と、臨機応変にお話するだけなのですが、それだけでも安心してもらえるんだな、ということを実感しますね。

「戒名をどうするか」「お盆やお彼岸の迎え方が分からない」などというのは、しょっちゅうです。だから、盂蘭盆の説明書きとか、いろいろ小道具を持参するんです。

お線香を持つていくこともあります。少し前、「東日本大震災」が起きた時だったのですが、「震災で亡くなった人を慰めたいけれど、自分には何にもできない

い。それがづらい」と話しかけてきた人がいました。それで、お線香を渡して、「ここは駅前広場だから焚けないけど、家に帰ったら焚いて祈りましょうね。私も祈ります」と。それだけのことなのですが、みんなホッと帰って行くのです。

(注) ここで言うテラワダとは、パーリ仏典を所依とする仏教。上座部仏教とは、パーリ仏典を含む同系の仏典(漢訳)を所依とする仏教。

* 著者の活動

酒主浄忍氏は昭和二十二年、栃木県の生まれ。会社勤務のかわら、田久保周營、東元慶喜の両師に就いて漢語・梵語・パーリ語の仏典を、またスリランカとミャンマーの上座部仏教の諸師からテラワダを学んだ。托鉢と仏教者の生きざまを実践し、さらに現在は、在住する栃木県小山市で仏教学習会「ダシマーサナ(法座)」を主宰している。

著書に『基本仏教のすすめ』『仏教祝賀状と仏暦使用のすすめ』など、訳書に『ブッダ画伝』(原本は中国語)、『ローウェダンサガラワ』(原本はシンハラ語)、『スパーシタヤ(善説)』(同)などがある。

仏教を生活に活かす

—— 出家でなくとも「沙門」であるということは、修行もそうでしょうが、日常生活の中にまさに仏教を取り込むということなのか。

酒主 「沙門」を名乗らなくても、仏教を生活に活かす、実践してみるというのは、それは誰にとっても大事なことだと思えますね。

私はいつも言うのですが、まず自分の立場を見極めて、そして、仏陀の教えの中のどれとどれを現在の生活の中で実践できるかを考えていく。それを見極めるために勉強していく。それが大事です。そうでなければ、頭だけの仏教理解になってしまいます。実際の生活があるからこそ、仏教を活かせる場所があるわけですからね。

ですから私も「沙門」を名乗ったからといって特別なことをするわけではありません。誰でもそうあるべきことをやっているだけです。ただ、私の場合は、仏教を人々に広めたい、他の人にもっと仏教を知ってもらいたいという気持ちでやっている活動があるという

違いはありますが。

—— 例えば、仏教の基本的な生活態度として、具体的にいうと、どんなことになりませんか。

酒主 まずはやはり、仏教の根本戒律としての五戒を知って、極力、それを守りながら実践する、あるいは生活していくことが一番です。

五戒ではまず「嘘をつかない」。当然、嘘をつかなければ正直者として信用されるわけです。「酒を飲まない」。これは、本来は、飲んだ結果として自己を見失うことになってしまっただけでいけなから酒を飲むなということですよ。酒をたしなんでよく睡眠がとれて、疲労回復になるというのだったら、これは悪いことではありません。

つまりは、仏陀の教えを聞いて、知って、それを自分の生活を送っていくために補助的なものとする。それが仏教を生活に取り込む、活かすということなのです。それでいいのです。出家者は別として、繰り返しになるけれど、在家の人間はあくまで自分の生活があつてのことなのですから。

少欲知足

—— 仏教的な生き方を心にとめておけば、人間社会は良くなるということですか。

酒主 現代社会の様々な問題だって、やはり世間に仏教的な心がないから起きているわけですよ。五戒の例の続きでいえば、「殺してはいけない」。もちろん殺人は論外ですが、そうは言っても、肉や魚を食えということで市場はどんどんやっているわけですから、殺生をすべてなくすことは無理です。だけれど、ちょっと立ち止まって、殺生に関する戒のことを考えてみる。「盗んではいけない」。盗みを勧める社会はないかもしれません。あとは、「不倫をしてはいけない」。しかしテレビをつければ不倫ドラマなんか盛んにやっています、それがカッコいいという風潮さえある。

そう見てくると、誇大広告でもそうですが、すべては、人間の欲にどんどん入り込むことで現代社会が成り立っている。

しかし、それではいけないと思うのです。総てをスツと簡単に受け入れてしまうというのが、仏教徒とし

てはいけない。何事かがあったら、ちょっと引いてみて、「これは果たしてどんなものかな」と自分で判断していかないといけないのです。世間がそうだからといって、考えずにそのまま受け入れるというのは、在家だろうと仏教徒としては良くないですね。

そのためには、ある程度、欲をかかないということが基本です。昔から言われる言葉ですが、「少欲知足」です。「欲を少なく、足るを知る」こと。これを念頭に置かないと、やはり仏教実践もままならないと思います。

貪・瞋・癡は三毒といって、この煩惱が人間の苦しみの根源で、克服すべきものだといえますけれど、とくに貪欲という貪りを抑える、少欲であることが大切です。欲望が収まれば、他の煩惱や悪い心もだんだん収まっていくのだと思います。

とにかく小難しい論はひとまず置いておいて、少し辛抱してみるとか、実行できそうなもの、自分の今の生活に必要なものを見極めることです。甘んじて足るとすれば自分の心は満足するわけですから。そうやって行いを正していけばいいんだと思います。

いま大問題になっている原子力発電だって、その危

ういところは、我々の欲望のなせるところなんです。次から次へと電気を消費する生活、電子機器に頼る生活を究極まで進めてしまったがゆえに、原発を作らなければならなくなったわけですからね。

勉強会「法座」を始めた理由

—— 先ほどちよつとおっしゃいましたが、仏教を広める活動もしていらつしやいますね。それも実践の一つだと思つのですが、仏教を人々に知ってもらいたいと思つようになったきっかけは。

酒主 仏教つて生活に役立つのですよ。だから勉強して、知ってもらいたいな、と。

私自身、仏教を勉強して、実践して……と、そういうことだけをやっていたわけだけれど、自分が知識なりを身に付け、生活に取り入れてやっていくにつれ、仏教を本当に知っている人がいかに少ないかが分かってきたのです。日本は仏教国だといひながら、あるいは仏教徒だといひながら、じつは「仏教らしきもの」というだけになつてゐるんですね。

初めから「仏教を広めたい」なんて思つていたわけ

ではないんです。托鉢で街角に立つて、仏教精神がいかに世の中に少ないかということを感じたのです。これではいけないと本気で思い始めました。

仏教ブームというのはあるんですね。しかしそれは、私が押し進めようとしている方向ではないのですよ。仏像ブーム、写経ブーム……。それはきっかけにはなるでしょうが、仏像の、写経の奥を見なければ意味がないし、生活に役立つていなければやはり無意味ですからね。

あるいは、表面を見ていて、やがて深く入つていくと思つても、入つていく手立てを知らない人も多いのです。どこに行けばいいか分からない。その手助けというか、一助になりたいとは思つています。

だから、托鉢をやりながら、その場で同時に、聞きに来た人には答えられるように、また要望には応えられるようになろうと思ひました。そこから一歩進んで、やがて人を集めて勉強会を開こうということになつたのです。

仏教の流れを知り、 仏典を味わう

——主宰されている、その勉強会について教えてく
ださい。

酒主 「ダンマーサナ」と名付けています。訳すと
「法座」ということになります。平均で月に二回、市
立図書館の一室を借りてやっています。

私としては、本当は、托鉢を中心に仏教を布教して
いければいいと思っていた。実際に、そうしているの
ですが、それだけだと一時的に話を聞いてもらうだけ
のことになってしまう。それはそれでいいのですが、
続けて興味を持って勉強したいという人もいるわけで、
そのときは、テキストの形をもって勉強会に集うこと
も必要になってくるわけですね。

「ダンマーサナ」の大きな目的は、まずは仏教を幅広
く掘んでもらおうということなのです。源流を知るた
めに上座部、つまりテーラワダーのパーリ仏典にも触
れて、仏教の歴史的な流れを図式化しながらお話しし
ています。スリランカなどのテーラワダーの歴史を掘

んだうえで、日本の宗派仏教についても「こういう歴
史の流れがあつて、やがて大乘の流れによつて、こう
いう形になってきているんですよ」と、教えていく。

そのように全体像、流れを見てもらうことによつて、
あとは各自が自分に合った仏教を選択すればいい。で
すから一宗派だけにこだわるわけではなく、また日本
仏教だけでもなくて、テーラワダーも勉強する。それ
が我々の勉強会「ダンマーサナ」の特色だと思つてい
ます。

仏陀、つまりお釈迦様の生の教えに近いテーラワー
ダにはパーリ語の仏典と漢訳仏典があるのですが、そ
のうち漢訳としてはだいたい阿含経に相当します。ス
リランカなどではパーリ仏典としての慈経と大吉祥経
と宝経が日常的に唱えられています。そういうことも
勉強会ではお話しするわけです。そうすることによつ
て、様々な意味で、比較をしてみらうわけですね。

もちろん日本の宗派仏教も仏教ですから、その精神
は総じて入っているのだけれども、残念ながら日本で
は阿含経を軽く見ているくらいがあつて、大乘の経典
だけを重視しているのですね。

また、大乘の中で見ても、「家の宗旨がどうも自分

の相性ではない。好きじゃない」という場合もあるわけです。だからまずは仏教全体を見るということが非常に大事なことだと思うのです。

—— テーラワダ（上座部）にしろ、大乘仏教にしろ、仏典というものが勉強会の中核にあるということですか。

酒主 「ダンマーサナ」、つまり「法座」ということですから、仏典は中心にありますよね。

やはり、お経というものは大事ですよ。浄土真宗を学ぶときも、例えば「正信偈」という偈文がありますよ、と。しかし、親鸞さんは何に基づいて、何を参考にして「正信偈」を作ったのか。結局それは、「大無量寿経」とか、あらゆる経典を読んでいるわけです。

「正信偈」をテーマにしても、「そこには、そういう流れと理由があつたのですよ」と、そういう視点でお話をします。

「どの宗派は駄目だ」とか、「あそこはいい」とか、それは言いたくないのです。同じ仏教なのだから、何を信奉してもらってもいい。仏教徒になってもらえればいい。ただ、基本とか源流というものは大事で、それはテーラワダ、上座部のほうに色濃く残っている

んです。

よく間違われていることもあるのですよ。「これは宗祖さまの言葉だ」などといわれているものが、じつは上座部の仏典にすでに書いてある。だから駄目なのではなく、「宗祖さまも、ここから学んだんだなあ」と理解できれば、より豊かになるじゃないですか。密教経典を読んでも、華嚴経典を読んでも、もちろん大乘独特の解釈はありますが、基本としてどこに源流があるかが見えてくる。それは示しておきたいと思うのです。

仏教を楽しむことも大切

—— その勉強会「ダンマーサナ」には、どういう人たちが参加されているんですか。

酒主 サラリーマンとか、定年退職したあとも仕事をしている人とか……。みんな仕事を持っている一般の人たちです。ですから開くのは日曜日ということになります。

ふだんは五、六人で、それほど規模を大きくしてやっているわけではない。でも、何かイベントをやると

きには声を掛けますので、十人以上が集まってくれ
ます。仏典を勉強すると言いましたけれど、じつは、実
践ということで他にもいろいろとやっているんです。

例えば一つは、自分たちで袈裟を作ってみる。縫い
物をするわけです。テーラワーダの南方仏教徒は幅一
〇センチくらいの袈裟を斜めにして肩に掛けるんです
ね。スリランカの人々もそうです。そういう袈裟を自
分の手で作ってみる。ただ作るだけではお裁縫と同じ
ですから、袈裟の歴史もしっかり学ぶ。袈裟の形にも
変遷があるわけですが、しかし袈裟の精神が込められ
た形の部分は保持されているんですね。さらに、実際
に袈裟を着けてみる。袈裟を身にまとう時に唱えるべ
きお経というものが、ちゃんとあるんです。

—— 参加者の皆さんは、だいぶ熱心そうですね。

酒主 熱心ですよ。勉強熱心ということは、つまり、
「仏教を楽しむ」という気持ちも、入り口としては大
切なことなのです。ときには巡礼に出たり、博
物館の仏教展を観覧に行くこともあるのですが、外に
出ていくときに、いつも仏教らしき物を持っているこ
とによって、どこでも仏教が楽しめるんです。

例えば、手作りの「真言手帳」というものを作って

みました。諸仏・諸菩薩を五十音順に網羅して並べて、
それぞれの仏・菩薩に対して唱えるべき真言を載せま
した。巻末には「帰三宝文」と「三帰文」の原文、そ
れからテーラワーダのパーリ語による「拝礼文」と
「三帰文」なども付けている。この手作り「真言手
帳」をポケットに入れておけば、参拝のときにも尊像
の前で適切な真言を唱えることができ、ご縁も、仏教
文化との関わりも深まるわけです。

やはり手作りの「巡礼手帳」というものもあります。
普通の納経帳とは違って、御朱印はもちろん、仏教展
や博物館のスタンプも、仏教に関係するメモ書きも入
れることができるようになってる。漢訳やパーリ語
のお経が入るので、基本の原稿は私が書いて渡すので
すが、足りないと思う部分があれば、みんな各自で挟
み込んだり、また表紙も自分たちで工夫して作ったり
しています。

そんなことを楽しみながらやっているうちに、たと
えば東大寺に参拝したとすれば、「毘盧遮那仏だから、
華嚴経を勉強しなきゃならないな」となる。あるいは、
それを事前に勉強するようになる。ただ漫然と大仏さ
んを鑑賞して、「すごいなあ」というだけでは終わら

なくなるわけです。仏典に書いてあることが、まさに仏像の造形になっているとか、美しいというだけではなくて、仏教の深いところ、根本的なところを学ぶようになります。

私自身、イラストや絵を描きますので、仏典などから画題を採った絵葉書を作って、そこにシンハラ文字（スリランカで話されているシンハラ人の言葉）やデーワナーガリー文字や漢語をちよつと添えて、勉強会の皆さんに配ります。「縁がある人に、この絵葉書を出してみましよう」と。クリスマスカードのようなもので、私はこれを仏賀状と呼んでいます。

そのシンハラ文字は渦巻きみたいな可愛らしい形をしているので、「では、シンハラ語で写経してみましようか」ということで挑戦してみました。シンハラ文字の写経なんて日本で初めてらしいですよ。そんなこともやっているわけです。

机上の勉強のみの脆さ

—— 先ほど、イベントも催すとおっしゃいましたが、具体的には。

酒主 勉強会で普段は私が講師を務めるわけですが、ときには例えばスリランカ人の僧侶に講話をお願いすることもあるのです。日本テラワータ仏教協会（東京都渋谷区）という団体がありますが、そこにも関わっているのです。その僧侶にも講話をお願いしています。

それから、野外活動をやる時もあるんです。イベントといいますか、お弁当を持って、野外でテントを張って、仏教を少しでも知ってもらおうという布教を試みですね。ちゃんと小道具もあるんですよ。仏殿をかたどったからくり六道絵解きとか、仏教に関係する目立つ物をいろいろ作って、並べて人寄せをする。

お寺での花祭りやお彼岸のときに参加して、多くの人たちと交流するのも活動の一つですね。花祭りといえば、やはり釈迦像に甘茶をかけるのが一般にも馴染み深いですが、私たちがいろいろやっていると物珍しげに人が集まってきます。

やはり部屋にこもって学習するだけでは駄目ですよ。ときには外に出ないと。結局のところ、机を並べて勉強するだけですと、その時は分かったつもりになっても、家に帰って実生活に戻ると、「知識は、もろ

くも崩れてしまう」ということを、勉強会のメンバーはみんなよく知っているみたいです。「なるほど」と納得したつもりで聞いていても、結局、日々の生活に生きていかないということですね。

仏教を活かすには、普段から経文の一節を唱えるとか、ことわざの入った「日めくりカレンダー」というものがあるけれど、そういうものの如く、絶えず親しんでいることが大事です。テララワダの国では実際、民衆がいつも絶えず、「ダンマパダ（発句経）」の一節を読んだり、聞いたりしている。そういうことをしているうちに、人間というのは自然に、今やっている自分の行為はいつたいてい何なんだと反省するようになるし、あるいは反省するだけでなく、くだらないことを止めるようにもなるのだと思います。

—— 楽しみ、親しみながら、仏教的な生き様になっているということですね。ところで、絵やイラストや手作り工作というものを大いに活用されているようですが、美術関係の勉強はされたんですか。

酒主 もともと、デザインを手掛ける製版会社に勤めていたんです。ですから若い頃から絵を描くのは好きでした。禅画風の水墨画は描いていたことがあるけれ

ど、東南アジア風、南アジア風の仏画は、沙門として生きようと決意してからです。そういえば、仏画を描くときも、仏画に取り掛かるための心構えとして伝えられた大乘の経典というものが、これもちゃんとあるんです。

—— 勉強会で頻繁に出てくるパーリ語やサンスクリット、中国語は。

酒主 中国語は幸いなことに若い頃、ずいぶん勉強しました。パーリ語は会社勤めをしながら、大学の聴講生として学びました。サンスクリットやパーリ語をやるらないと幅が広がらないと分かったものからです。明治以前は、仏典といったら漢語しかなかったわけですが、近代以降は、仏教はテララワダ、つまり上座部仏教も並行して勉強あるいは研究していかないと深まらないということが常識になってきましたからね。

法に照らして 日常を省みる生活を

—— 即生活である仏教ということをお話しいただいたわけですが、仏教という宗教は何も特別なことでは

ないということになりますね。

酒主 生活を離れて瞑想したり、苦行をやったりして、特別な境地を得ようとする人がよくいます。あるいは、仏教とはそういうものだと考えている人も世の中にたくさんいるらしいのですが、私はそうではないと思います。

自分が今、どういう行動をしているのか、どういう生活を送っているのか、つねに法——仏法ですが——に照らし合わせて、考えていく。日常そのものが修行であつて、また苦行であると思うのですよ。

実際、生活の中にすでに苦行つて多いですよ。自分の意のままにならないことがたくさんあるし。それをいかに乗り越えるかということは、仏陀の教えを見つめていけば、納得するものがある。そこが大切だと思います。たかだか一週間ほど瞑想したからといって、

何かが開けるといふものじゃないと思いますよ。

その点、上座部の仏教というのは、つまりテーラワードというのは、非常に基本的に根源的ですから、諸仏教の根本を学べると思います。私はよく、「上座部の経典や大蔵経を読んで理解すれば、あなたがたも宗派の宗祖になれますよ」と冗談でいうのです。なぜかというと、宗祖といわれる高僧たちも結局はそうだったから。根本を学んで知って、それを時代に合わせて展開、発展させることをやったのが宗派の宗祖さんといわれる人たちなんです。

しかし取りあえずは、仏教を生活に活かすことです。何宗であつても、仏教を勉強して、それに近い生活をしてみる。仏教は生活に役立つものだよということをも多くの皆さんに知ってもらいたいと思うんです。

現代宗教評論

第五号 二〇二一年

たちばな出版 より